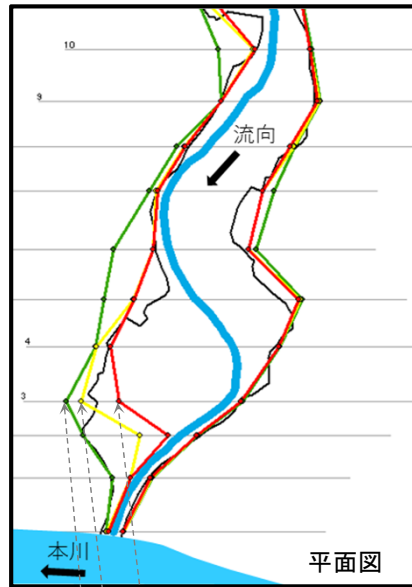


- 利用可能データが限られている都道府県管理の中小河川沿いの河川氾濫に係る簡易的な水害リスク情報の作成手法を示したもの。
- 航空レーザ測量による三次元地形データ(LPデータ)を用いて一次元不等流計算等の簡易な水位計算により概略浸水範囲を推定する手法と既存の地形分類図を活用して水害リスク特性を整理する手法の2手法を提示。

(1) 簡易的な水害リスク情報(LPデータ活用)

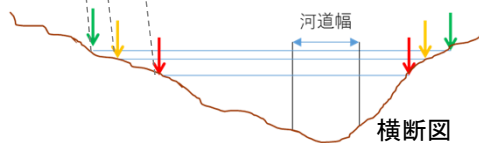
✓ LPデータを活用した一次元不等流計算等による手法



LPデータをもとに任意の河道横断面を設定

一定規模の流量について、簡易的な水位計算を実施

必要に応じて、複数の洪水規模(比較的発生頻度の高い洪水、過去に発生した大規模洪水等)について、相対的な浸水しやすさを図化



- 凡例 (降雨量は洪水到達時間(約1時間)内降雨量)
- : 降雨量60mm規模概略浸水範囲
 - : 降雨量90mm規模概略浸水範囲
 - : 降雨量160mm規模概略浸水範囲
 - : 実績氾濫範囲
 - : 河川

(2) 簡易的な水害リスク情報(地形分類活用)

✓ 既存の地形分類図に基づく手法
(既存地形分類図の解説等に基づく地形分類ごとの水害リスク特性の整理)



図1 航空写真

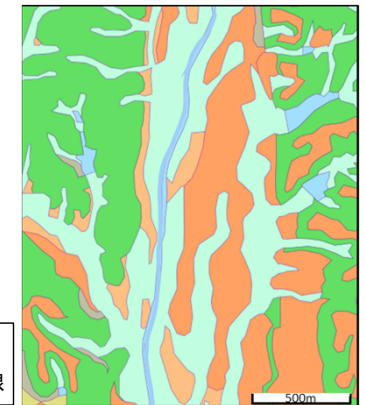


図2 地形分類図
(2万5千分1土地条件図)

該当する地形分類	地形	特徴	災害との関係
山地斜面等	山地	起伏が大きく、周辺の低平な土地と明確な山麓によって分けられる土地。火山、丘陵地を含める。	通常は洪水の影響を受けることは少ないが、不安定な堆積物が豪雨や洪水によって流されることがあり、大雨によって水を含んだ場合、それ自体が崩落する場合もある。
更新世段丘	台地・段丘	過去に形成された平地(低地)が、その後の地殻変動、海水面の低下などによって現在の低地よりも階段状に高くなった比較的平坦な地形。	低地からの比高が2~3m以下の段丘は大規模な洪水の際に浸水することがある。段丘は崩壊のおそれが高くなるため注意が必要。また、台地・段丘上の浅い谷は一時的に洪水の流路となったり、下流側に盛土がある場合はその盛土に遮られて浸水したりするため注意が必要。
完新世段丘	台地・段丘	斜面の下方、山間の谷底または谷の出口等に堆積した、岩屑又は風化土等の堆積地形。	豪雨などをきっかけに背後の斜面から土砂が崩落・流出しやすいため注意が必要。沖積錐や土砂堆が形成されているところは、崩壊や土石流の発生の恐れがある。
山麓堆積地形	山麓堆積地形	斜面の下方、山間の谷底または谷の出口等に堆積した、岩屑又は風化土等の堆積地形。	山麓部において主として砂礫からなる扇状の堆積地形で表面傾斜が1.5度以下の地形。
扇状地	扇状地	山麓部において主として砂礫からなる扇状の堆積地形で表面傾斜が1.5度以下の地形。	山地からの出水がその表面を流下するときに浸水する恐れがある。洪水時の浸水深、浸水時間は小さいが土石流や土砂流による著しい堆積・浸食が発生し被害が生じる場合がある。
谷底平野・氾濫平野	氾濫平野	山地内の谷や台地を含む谷の底にある比較的幅の狭い低地を指す。	氾濫原では、破壊・越流による洪水氾濫の他、内水氾濫も起きやすくなる。砂州や自然堤防等で出口を塞がれた谷底平野では、内水氾濫が起こりやすくなる。(氾濫原・谷底平野に関する説明文より)
河川・水面	現河道、水面	河川内の常時水流がある部分を指す。	-

(出典)治水地形分類図解説書

※本手引きが示す手法に限定せず、洪水浸水想定区域図作成手法等の準用についても検討が必要。

※本手引きに示す手法により簡易的な水害リスク情報を作成するに当たっては、必要に応じ、専門家等の助言を仰ぐことが重要。また、提供に当たっては、精度の限界を踏まえ、「相対的な浸水しやすさ」を示しているに過ぎないことを明示しておくことが必要。